

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 人間総合科学大学

所 属 保健医療学部

看護学科

名 前 臼井 美登里

作成日 2023年9月24日

1. 責務（何を行っているか、何を果たしているか）

昨年 10 月、東京健康科学大学ベトナム附属久住病院準備室より異動。

- 2022 年 10/17～12/23、2023 年 1/9～27 老年期臨地実習 4 クールを担当
（上記期間中、2022 年 11/7～11/11：基礎 I 担当）

- 2023 年 4 月～

科目変更：成人領域の急性期・慢性期、統合実習、基礎Ⅱ、看護研究Ⅱ、大学生入門

学年担当：3 年生担任 委員会活動：FD 推進委員会

臨床現場では、日常生活のケアにおいても、患者個々に求めるものが異なる。看護の対象が人である以上、看護における答えは必ずしも一つではない。そのため、学生が積極的に経験を積むことで、指導者や担当教員から多くの指摘を得られるよう、調整役を担っている。そして、多くの指摘を「怒られた」と捉えるのではなく、自身の成長に繋がっていると実感できるよう関わった。達成したことを褒め、患者との積極的な関りが信頼関係を築き、実習の最終日には感謝や励ましの言葉を頂いた。看護の楽しさを、少しは実感できたのではないかと考える。

2. 理念（教育に対する考え方）

当大学院における博士論文のテーマは、ストレス研究であった。当時から、ストレスは必ずしも悪いものではなく、人がイキイキと生きるうえで必要なものと考えていた。大学病院の高度救命救急センターで、ヘリナース、災害ナース、ICU ナース、認定看護師等、スペシャリストを育ててきた。スペシャリストとして育った看護師達は、多くのストレスにさらされながら、ストレスをうまくモチベーションに繋げていた。また、スペシャリストを目指す看護師や、スペシャリストとして育つ過程を見てきたが、同時に挫折する看護師も見てきた。

「「こころ」と「からだ」の関連性から人間を総合的・統合的に理解するための学びと、日々変化し続ける世の中を生き抜くために必要な、流されない強さとどんな状況でもしなやかに対応できる人間力を養う。」という本学の考えは、前述したスペシャリストとして育った看護師に培われた要素であると感じた。そして、看護の道を極めようとするならば、まず自身の「こころ」と「からだ」を正しく知ること、人を正しく知ることが大切である。人として完璧な人間はいない。だからこそ、自身の未熟性(=人間らしさ)を認めることで、相手の未熟性(=人間らしさ)を受け入れることができる。同時に自身の未熟性を認めることができれば、一生学び続け、そして一生自分を高めていける柔軟でしなやかな人間性を得ることができるのではないだろうか。

また、「左手に生きる力」は、前述した「流されない強さとどんな状況でもしなやかに対応できる人間力」のことと捉えている。そして、「右手にライセンス」は、「医療の現場で専門識者として活躍するための資格取得をサポートする」と認識している。保健医療学部は、専門職業人を育成する場所である。ただ知識を覚えるだけでなく、LTD やグループワーク、実技演習、臨地実習等を体験することで、知識・技術を深めることができる。医療現場で求められるチームワークは、限られた個々の能力をそれぞれが遺憾なく発揮する。足りない部分は他の誰かが補完することで、最善のチーム医療が発揮できる。そして、医療現場で患者との関りが一番深いのは看護師であり、チーム医療の要である。本学の学生達には、「左手に生きる力」と「右手にライセンス」を携えて、チーム医療を担っていける看護師として育ててほしいと願っている。

3. 方法（教育方法において大切にしていること）

私は、特任准教授として臨床に特化しており、年約8か月臨地実習を担当している。

実習において一番大切にしていることは、学生、患者、指導者との関係性を調整することである。学生はこれまで、他者に評価されることをあまり意識せずに過ごしてきた。実習では、指導者、教員、患者から評価されていることを強く意識する。実習における不安は、指導者、教員、患者との関係性であることが多い。しかし、学生の性質も一律ではなく、不安を感じることなく、積極性を発揮する者もいるが、リスクを予測できていない可能性もある。学生の性質が個々に異なるように、指導者、患者にも個性がある。したがって、3者全ての個別性を把握したうえで、学生個々に合わせた教育方法を選択する必要がある。しかし、ほとんど面識のない人の人間性を正しく掌握することは容易ではない。だからこそ、自身が3者と積極的に関わることで、先入観を持つことなく、流動的に対応するよう心がけている。

次に、学生が積極的に患者への看護技術を体験し、多くの教示を得ることである。看護技術の体験は、指導者または担当教員とともに実施する。受け持ち当初は、日々のバイタルサインや環境整備を担当教員と実施し、一人で実施可能か評価する。同時に、患者とのコミュニケーション状況も評価する。まず、環境整備やバイタルサインの技術提供を実施する流れで、患者とのコミュニケーションを自然にできるようになることが大切である。看護技術については、指導者と実施する際は、指導者の指示に従う。担当教員と実施する際は、学生に対する知識や技術の確認をし、知識の不足分はその場で補足させる。そして、事前に作成された基本的な看護技術の手順書を基に、患者の状態に合わせた手順を事前に話し合う。実践しながら、患者の反応や意見を聞くことで、実践の評価、修正をする。最終的には、患者に合わせた個別性のある看護技術の提供である。臨床現場では、日常生活ケアにおいても、患者個々に求めるものが異なる。看護の対象が人である以上、看護における答えは必ずしも一つではない。同時に、指導の対象となる学生も人である以上、その指導方法は個々に異なる。したがって、実習では、指導の対象となる学生の能力や性質に合わせた教育方法で、患者の病態・性質に合わせた個別性のある看護を指導することを心掛けている。

4. 成果（学生さんからの評価に対して、学生さんの学修成果について）

2022年10月17日～12月23日 指扇病院(老年実習) 3クール 学生総数13名

2023年1月23日～1月27日 指扇病院(老年実習) 1クール 学生数4名

*指扇病院でコロナが増加し、実習続行については、こちらの判断に委ねられた。

⇒続行したかったが、当方の学生及び同居者のコロナ発生が増加し、実習病院に迷惑はかけられないと判断し、学内の決定をした。

コロナ禍にありながら、指扇病院との関係性を築き、3か月に渡り臨床での実習を可能にした。また、自身は実習に特化しているため、学生からの客観的評価は得られていない。だが、担当した学生17名中16名が、統合実習で老年を第1及び第2で希望していた。

5. 目標（教育活動の中短期目標と達成時期）

（長期目標）

アセスメント能力の向上と人間力の強化

（短期目標） 各グループ実習期間である3週間

1. 患者、臨床指導者、担当教員との関係性を築くことができる。
2. 患者に対し、積極的に看護技術を提供できる。
3. 患者に合わせた、個別性のある看護が提供できる。
4. 患者からの感謝の言葉や、良好な反応を得ることができる。

【添付資料】

特になし
